

## 発達性読み書き障害の早期発見に向けての検討† ～小学低学年児童へのスクリーニング検査の実施～

兜森真粧美\*

秋田大学大学院

武田 篤\*\*

秋田大学教育文化学部

発達性読み書き障害とは、知能や知覚に問題がないにもかかわらず、読みが極端に苦手な結果として書くことも苦手なものをいう。本研究では、この発達性読み書き障害の子どもを早期に発見する方法を検討するために、小学校低学年児童に対してスクリーニング検査を実施した。対象は通常学級に在籍する小学校1・2年生、672名である。スクリーニングは以下の2段階で行った。第1段階では、学級担任にチェックリストを用いて児童の読み書きの評価を行ってもらい、疑いのある児童を選出した。その結果1年生で18名、2年生で46名の児童が選出された。第2段階として、これらの児童に対して、「小学生の読み書きスクリーニング検査」と簡易的な知能検査として「レーヴン色彩マトリックス検査」を個別に実施した。最終的に発達性読み書き障害が疑われた児童は、1年生で1名(0.3%)、2年生で10名(2.9%)であった。これらの結果から、検査方法の妥当性と実施上の課題について検討した。

キーワード：発達性読み書き障害、スクリーニング検査、小学生

### I はじめに

平成19年度から障害児教育は、これまでの特殊教育から特別支援教育へと大きく転換した。なかでも従来の特殊教育の対象に加えて、LD(学習障害)、ADHD(注意欠陥・多動性障害)、高機能自閉症を新たな支援対象としたことが大きな特徴である。この中のLDとは、知的な遅れがなく、本人もまじめに取り組んでいるにもかかわらず、読み書きや計算など学習に必要とされる基本的な能力を身につけることが難しく、その結果として学業不振に陥ってしまうものである。LDには様々なタイプがあるが、その中核を占めていると考えられているのが発達性読み書き障害(developmental dyslexia)である(宇

野, 2004; 上野, 2006)。発達性読み書き障害とは、視覚や聴覚の感覚障害がなく、かつ読みの前提となる知的機能も正常範囲内にあり、また文字を習得するための学習の機会が与えられているにもかかわらず、読み方がたどたどしかったり、読み間違いが多かったり、読むのに時間がかかったりするなど、読むことが苦手で、結果として書くことも苦手なものをいう(Haynes, 1998; 加藤, 2003)。なお、読み書きを獲得した後に病気や事故等による脳損傷によっても読み書き障害が起こりうるため、このような障害は「後天性失読症」として、発達性読み書き障害とは区別されている。

現時点では、なぜ読み書きに困難が生じるのか、また発生率はどれくらいなのか、その指導はどのようにすればよいのかなど、まだ不明な点も多いのが現状である。原因については、発達性読み書き障害が家族性で起こることが知られている。つまり生物学的(遺伝的)要因がある可能性を示唆している。二卵性双生児では発達性読み書き障害の一致率が

2008年1月28日受理

†Study on Early Detection of Dyslexia: Screening of Lower Grade Elementary School Children

\*Masami KABUTOMORI, Graduate School, Akita University, Akita

\*\*Atsushi TAKEDA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

20～35%であるのに対し、一卵性双生児では84～100%に達するという (Démonet, Taylor, Chaix, 2004). 発生率については、英語圏では9～10%, ドイツ語圏で約5%, イタリア語圏で約1%とされている (宇野, 2004). 性差に関しては、一般に女児より男児の方が多くとされているが (Snowling, 2000), 男女差はないという報告もある (Shaywitz, 2003; 宇野, 2002). 日本での発生率に関する最初の報告は、1968年の牧田が東京都で実施したもので、0.98%とされた。この結果が1%に満たなかったことから、その後長い間、日本では発達性読み書き障害がほとんどいないのではないかと考えられてきた。しかし、文部科学省が2002年2月～3月に実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果では、学習面に著しい困難を示す児童生徒の割合が4.5%と発表された。もちろんこの結果は、教師へのアンケート調査によることから、この数値が直ちにLDであると判断することはできないものの、一定程度の割合でLDの子どもたちが存在する可能性が示唆された。また、宇野 (2002) も最近、日本語の読みの障害について、ひらがな1%・カタカナ2～3%・漢字5～6%、書きの障害では、ひらがな2%・カタカナ5%・漢字7～9%と報告し、日本でも一定程度の割合で発達性読み書き障害の子どもが存在する可能性を指摘している。

ところで、子どもに読み書きの困難があっても、在籍学級担任や保護者がすぐに発達性読み書き障害と判断することは容易なことではない。それはADHDや高機能自閉症のように就学前から多動であったり、同年齢の友達と遊ぶことができなかったりなどの特徴的な行動がないからである。発達性読み書き障害の場合は、小学校入学後に机上での教科学習が始まってからつまづきが出てくるが、直接子どもにかかわる教師が子どもの読み書きの能力を測る客観的な手立てがないため、きちんと評価・判断できず、早期からの支援や指導につなげられずにいるのが現状である。従って、読み書きに困難があると早期に気づき、適切な評価・判断をし、できるだけ早く対応していくことを可能とするために、どのような方法が有効かを検討するのは極めて重要なことといえる。そこで本研究では、小学校低学年児童を対象として、できるだけ早い時期に、読み書きの困難に気づく手だてについて検討することとした。

具体的には、宇野ら (2006) が開発した「小学生の読み書きスクリーニング検査」を小学校低学年児童に実施し、発達性読み書き障害の児童の発見に有効かどうかについて検討することとした。

## II 研究

### 研究1 教師による児童の読み書き評価

本研究の最終的な目的は、小学生の読み書きスクリーニング検査を用いて小学校低学年児童にどれくらいの割合で発達性読み書き障害が存在するかを明らかにすることにある。ただし小学生の読み書きスクリーニング検査は個別検査のため、全児童にこれを実施することは時間的にも難しい現実がある。そこで研究の第一段階として、学級担任に児童の読み書きの評価を行ってもらい、個別検査を実施する児童の選出を図ることとした。

#### 1. 対象と方法

##### 1) 対象

A市内公立小学校6校の通常学級に在籍する1・2年の児童691名を対象とした。調査を実施するにあたって、保護者に調査の目的を記した文書を配布し、調査に参加を希望しない場合には申し出てもらった。また、知的障害ないし広汎性発達障害の診断がある児童、および調査当日に欠席した児童19名については除外した。最終的に今回の調査対象となった児童は1年生が329名 (男175名, 女154名), 2年生が343名 (男181名, 女162名), 計672名 (男356名, 女316名) であった (Table 1)。

##### 2) 方法

2006年8月に学級担任から児童の読み書きの評価を行ってもらった。担任による読み書きの評価には、文部科学省が2002年に実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」のうち、読み書きに関係した10項目 (以下、SENチェックリスト) を用いた。Table 2に読み書きに関するSENチェックリストの質問項目を示した。学級担任に各項目について「ない」、「まれにある」、「ときどきある」、「ある」の4段階

Table 1 対象

学年	全体	男	女
1年生	329名	175	154
2年生	343	181	162

Table 2 読み書きに関する教師用チェックリスト

【読む】	1	初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える
	2	文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読みだりする
	3	音読が遅い
	4	勝手読みがある（「いきました」を「いきました」と読む）
	5	文章の要点を正しく読みとることが難しい
【書く】	1	読みにくい字を書く（字の形や大きさが整っていない、まっすぐに書けない）
	2	独特の筆順で書く
	3	漢字の細かい部分を書き間違える
	4	句読点が抜けたり、正しく打つことができない
	5	限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書かない

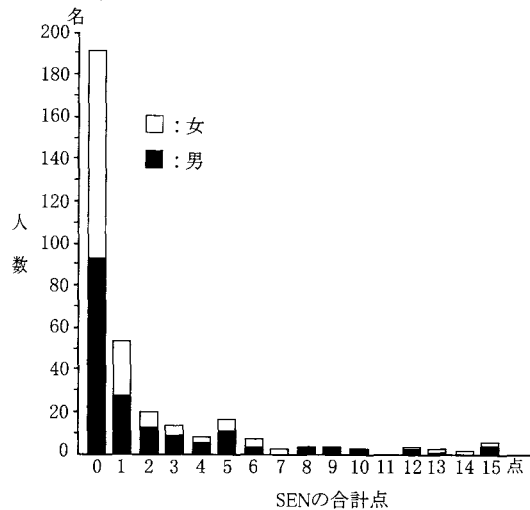


Fig. 1-1 担任による「読む」の評価（1年生）

による評定を求め、それぞれに0点、1点、2点、3点を与えた。

## 2. 結果

### 1) 得点の分布状況

Fig. 1-1 および 1-2 に学級担任による SEN チェックリストでの読み書きの評価結果を示した。なお、1年生に関しては、複数の教師から「書く」に関する評価は難しく、評価できないとの回答がなされたため、「読む」に関する5項目のみで評価することとした。Fig. 1-1 に示したように1年生では SEN の合計点が0点のものが191名（58%）と半数以上

を占めた。2点以降はおおむね右肩下りの分布を示した。また、1年生における SEN の合計点の平均は  $1.6 \pm 2.9$ （平均  $\pm$  SD）であった。性別では、対応のない t 検定を実施したところ、男児（ $1.9 \pm 3.2$ ）の方が女児（ $1.2 \pm 2.6$ ）に比して、有意に合計点が高かった（ $t(327) = 2.06, p < .05$ ）。2年生でも、「読む」に関する SEN の合計点が0点のものは167名（49%）と半数近くを占め、2点以降はおおむね右肩下りの分布を示した。また、SEN の平均点は  $2.2 \pm 3.3$  で、やはり男児（ $2.8 \pm 3.6$ ）の方が女児（ $1.6 \pm 2.8$ ）よりも有意に高かった（ $t(341) = 3.41,$

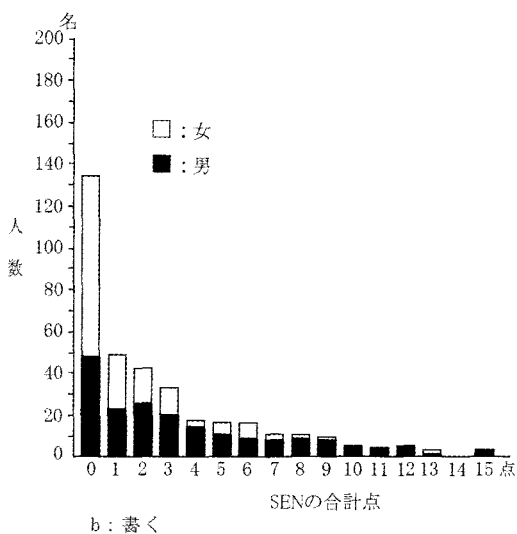
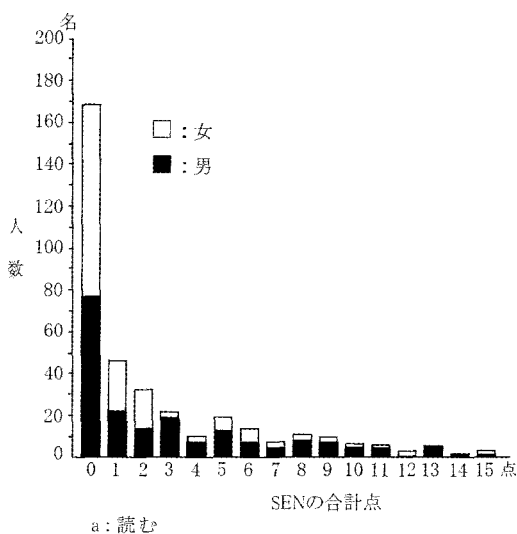


Fig. 1-2 担任による「読む」と「書く」の評価（2年生）

$p < .01$ ). 「書く」に関しては SEN の合計点が 0 点のものは 133 名 (39%) と「読む」に比べると少なかったが、2 点以降はおおむね右肩下がりの分布を示した。また、SEN の平均点は  $2.5 \pm 3.2$  で、やはり男児 ( $3.4 \pm 3.6$ ) の方が女児 ( $1.4 \pm 2.2$ ) よりも有意に高かった ( $t(341) = 6.18, p < .01$ )。

## 2) 個別検査実施対象児の選出

文部科学省 (2002) の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」では、今回用いた「読む」「書く」の項目で各々の合計得点が 12 点以上のものを問題ありと判定していたが、今回は読み書きに問題のありそうな児童をとりこぼさないようにするため、合計得点が 8 点以上のものを小学生の読み書きスクリーニング検査を個別に実施する児童として選出することとした。その結果、1 年生で 18 名 (男 14 名, 女 4 名), 2 年生で 46 名 (男 37 名, 女 9 名) が、個別検査を実施する児童として選出された。

## 研究 2 小学生の読み書きスクリーニング検査の実施

### 1. 対象と方法

研究 1 によって選出された児童に「小学生の読み書きスクリーニング検査」(宇野ら, 2006) を各児童が在籍する学校で、同年 9~12 月にかけて個別に実施した。なお、小学生の読み書きスクリーニング検査は、「音読」と「書字」の検査が各々 20 問から構成されている。今回、1 年生ではひらがなのみ、2 年生ではひらがな・カタカナ・漢字について実施した。この検査で用いたひらがな・カタカナの課題では 1 文字 (清音・濁音・半濁音・拗音) と単語 (2~5 文字) で、2 年生の漢字の課題では 1 年生の配当漢字の「音読」と「書字」が各 20 問である。また、発達性読み書き障害の診断には知的能力が正常範囲にあることが必要なことから、小学生の読み書きスクリーニング検査に加え、児童の知的能力を評価するための簡易検査として「レーヴン色彩マトリックス検査」も実施した。この検査は、空所に合う模様を選択するもので、全部で 36 問からなる。指さしで答えるため 5~10 分程度の検査時間で実施ができることから、海外では小児から成人までの知能検査としても使用されている。我が国でもこのレーヴン色彩マトリックス検査に関して、宇野ら (2005) が小児での標準化をおこなっており、今回はこの値を使用して知的能力を評価した。両検査は 1 単位時間

(45 分) の中で児童が在籍する学級毎に実施した。検査は言語障害担当の教師 2 名の他、障害児教育を専攻する大学院生 4 名が実施した。

本研究では発達性読み書き障害を①「小学生の読み書きスクリーニング検査」のいずれかの項目の得点が標準点から -2SD を超え、かつ②「レーヴン色彩マトリックス検査」の得点は標準点の -2SD を超えないものと、操作的に定義した。

## 2. 結果

### 1) 発達性読み書き障害の児童

個別検査の結果を Table 3-1 および 3-2 に示した。表の + の記号はレーヴン色彩マトリックスないし小学生の読み書きスクリーニング検査の得点が標準点から -2SD 以内のもの、すなわち問題のないものであり、- の記号は -2SD を超えるもの、すなわち問題のあるものを示している。1 年生では Table 3-1 の網掛けで示したように No.17 の児童が知的に問題なく (レーヴン色彩マトリックス得点が +),

Table 3-1 個別検査結果 (1 年生)

No.	性	レーヴン色彩マトリックス	小学生の読み書きスクリーニング			
			音読(ひらがな)		書字(ひらがな)	
			1文字	単語	1文字	単語
1	M	-	+	+	+	+
2	M	+	+	+	+	+
3	M	+	+	+	+	+
4	M	-	+	+	+	+
5	M	-	-	-	-	-
6	M	+	+	+	+	+
7	M	+	+	+	+	+
8	M	+	+	+	+	+
9	M	+	+	+	+	+
10	M	+	+	+	+	+
11	M	+	+	+	+	+
12	M	+	+	+	+	+
13	M	+	+	+	+	+
14	M	+	+	+	+	+
15	F	-	+	+	-	-
16	F	-	-	-	+	+
17	F	+	+	+	+	-
18	F	-	-	+	-	+

+ : レーヴン色彩マトリックスないし小学生の読み書きスクリーニング検査の得点が標準点から -2SD 以内のもの。

- : レーヴン色彩マトリックスないし小学生の読み書きスクリーニング検査の得点が標準点から -2SD を超えるもの。

網掛け部分が発達性読み書き障害の児童

Table 3-2 個別検査結果 (2年生)

No.	性	レーヴン 色彩マト リックス	小学生の読み書きスクリーニング									
			音 読					書 字				
			ひらがな		カタカナ		漢字	ひらがな		カタカナ		漢字
			1文字	単語	1文字	単語	単語	1文字	単語	1文字	単語	単語
1	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
2	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
3	M	-	+	+	+	+	+	+	-	+	+	+
4	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
5	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
6	M	-	+	+	+	+	+	-	-	+	+	+
7	M	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
8	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
9	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
10	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
11	M	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+
12	M	-	+	+	+	+	+	-	+	-	+	+
13	M	+	+	-	+	+	+	+	+	+	-	+
14	M	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+
15	M	+	-	-	+	+	+	-	-	-	-	+
16	M	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+
17	M	-	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+
18	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
19	M	+	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-
20	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
21	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
22	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
23	M	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+
24	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
25	M	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-
26	M	-	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+
27	M	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+
28	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
29	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
30	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
31	M	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
32	M	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+
33	M	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+
34	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
35	M	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+
36	M	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
37	M	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+
38	F	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
39	F	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
40	F	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+
41	F	+	+	+	-	+	+	+	-	-	-	-
42	F	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
43	F	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
44	F	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
45	F	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
46	F	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

+: レーヴン色彩マトリックスないし小学生の読み書きスクリーニング検査の得点が標準点から-2SD 以内のもの。  
 -: レーヴン色彩マトリックスないし小学生の読み書きスクリーニング検査の得点が標準点から-2SD を超えるもの。  
 網掛け部分が発達性読み書き障害の児童

Table 4 発達性読み書き障害の発生率

対象	発達性読み書き障害 (発生率)	性別	
		男	女
1年生 329名	1 (0.3%)	0	1
2年生 343	10 (2.9%)	8	2

小学生の読み書きスクリーニング検査の書字の単語項目で問題を認め、発達性読み書き障害と判断された。同様に2年生ではTable 3-2の網掛けで示したNo.13, 15, 19, 27, 31, 32, 33, 35, 40, 41の10名が発達性読み書き障害と判断された。したがって、今回の調査で発達性読み書き障害と判断された対象児童は、最終的にTable 4に示したように、1年生で0.3%、2年生で2.9%という結果になった。1年生では2年生に比し、著しく少なかった。また、2年生では男児の割合が女児の4倍であった。

## 2) 知能と読み書きの関係

Fig. 2に、個々の児童の小学生の読み書きスクリーニング検査の得点とレーヴン色彩マトリックス検査の得点との関係を示した。図を4分割した右下、すなわち網掛けの部分が発達性読み書き障害と判断された児童である(知的に問題なく、読み書きに問題がある)。4分割した左下は、同じく読み書きに問題を認めたが、知的障害が疑われたものである。また4分割の左上は知的障害が疑われるが、読み書きの問題を認めないものである。4分割の右上は、読み書きも、知的にも問題ない児童である。なお、○の中の数字はTable 3-1および3-2で示した児童の

No.を示している。この図からもわかるように、1年生では読み書きに問題を示したものが5名いたが、内4名までもが知的障害を疑われた。2年生でも読み書きに問題を示したものが27名いたが、半数以上の17名に知的障害が疑われた。

## III 考察

### 1. 方法の妥当性

小学校低学年児童における発達性読み書き障害の発見のために、今回我々が用いた担任教師によるSENチェックリスト、および小学生の読み書きスクリーニング検査、レーヴン色彩マトリックス検査による方法は、2年生では有効と思われたが、1年生では難しいと考えられた。以下にその理由について検討した。

#### 1) 1年生について

小学生の読み書きスクリーニング検査において今回1年生では、ひらがなのみを実施した。2年生ではカタカナの読み書きが $-2SD$ を超える児童が多かったこと、発達性読み書き障害は一般にひらがなでは出にくいといわれることを考慮すると(辰巳・宇野, 2006; 大石・斎藤, 1999)、1年生に対してもカタカナでの確認が必要と思われた。しかし、一般にカタカナを学校で学習する時期は1年生の後半のため、ひらがなより練習回数や時間が少ないのが現状である。従って、1年生でカタカナの読み書きを確認するのに適した時期は、学年末以降が良いと思われた。また今回1年生では、担任によるSEN

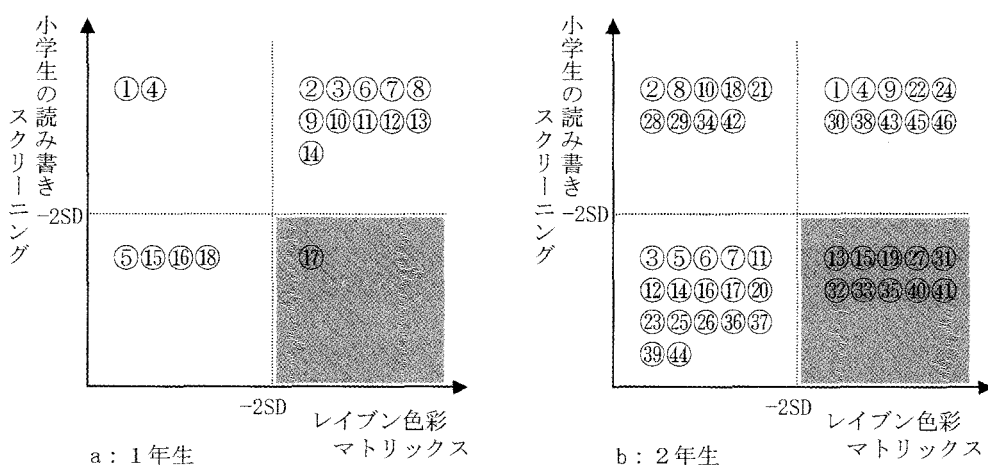


Fig. 2 レイヴン色彩マトリックスと小学生の読み書きスクリーニング検査得点との関係  
網掛け部分が発達性読み書き障害の児童

チェックリストでの評価項目は「読む」のみを実施した。「書く」を実施しなかった理由は、SENチェックリストの記入時期が8月であったため、この時期の1年生ではまだ書字の学習が十分なされていないことや担任が個々の児童の読み書きの状態を十分把握できていない、という意見が複数の担任から出されたためである。

以上のことから、1年生のスクリーニングに関しては実施時期の再検討が必要であり、おそらく学年末か2学年進級後すぐが望ましいと思われた。

## 2) 2年生について

今回の調査での2年生の発達性読み書き障害の発生率は2.9%であった。宇野(2002)は、1~6年生を対象とした調査で読みの障害については、ひらがな1%、カタカナ2~3%、漢字5~6%、また書きの障害については、ひらがな2%、カタカナ5%、漢字7~9%と報告している。今回の調査で低値となった理由として考えられるのは、対象学年が低学年で、2年生において漢字の問題は1年生の漢字であったため比較的定着できていたことが考えられる。小学校で習う漢字は2年生以降、画数が多くなることや学習する数が増えることから、対象学年を1~6年とした場合発生率の数値が変わる可能性があると思われた。

## 2. 検査実施上の課題

### 1) 知的発達の評価

2年生では担任の読み書きの評価により学年全体から46名の児童が疑いあるものとして選出され、その後個別検査で小学生の読み書きスクリーニング検査とレーヴン色彩マトリックス検査を実施し、最終的に10人が発達性読み書き障害と判断された。今回、知的発達に問題がないのかを判断するためにレーヴン色彩マトリックス検査を用いたが、対象とした46名のうち26名と、半数以上に知的発達に問題があると評価された。知的障害の疫学からみて、この値は大きすぎることから、今後はWISCなどの知能検査を用いて評価するなど検討が必要である。

### 2) 検査時間と検査者

今回の検査は、1単位時間(45分)の中で、児童が在籍する学級毎に個別に実施した。レーヴン色彩マトリックス検査は5~10分程度、小学生読み書きスクリーニング検査では1年生が約15分、2年生では約25分であった。1年生が短時間で済んだのは、ひらがなのみを実施したことによる。小学生の読み

書きスクリーニング検査もレーヴン色彩マトリックス検査も個別検査であることから、検査の実施に当たっては複数の教師(言語障害担当教員)や障害児教育を専攻する大学院生が同時に担当した。そのため事前に打ち合わせや練習を念入りに行った。通常学級の担任が研修なしに、直ちにこれらの検査をしようとしても難しいと思われる。従って、実施に当たっては言語障害担当教員など、一定程度の専門性を有するものが行う必要があると思われた。今後は、できれば通常の学級担任のように専門的な知識がなくても実施可能な、より簡便な検査や集団でも実施可能なスクリーニング検査の在り方についても検討が必要と思われた。

## 文 献

- Démonet JF, Taylor MJ, Chaux Y (2004) : Developmental dyslexia. *Lancet*, 363, 1451-60
- Haynes CW. (1998) : ディスレキシアにおける聴覚処理障害—米英での最近の研究動向. *LD (学習障害) —研究と実践—*, 7(1), 13-22
- 加藤醇子 (2003) : 読み書きの言語認知神経心理学と研究の動向. *LD (学習障害) —研究と実践—*, 12(3), 240-247
- 大石敬子・斎藤佐和子 (1999) : 言語発達障害における音韻の問題—読み書き障害の場合—. *音声言語医学*, 40, 378-387
- 辰巳格・宇野彰 (2006) : 発達性失読. *Annual Review 神経*, 2006, 333-339
- 上野一彦 (2006) : LD (学習障害) とディスレキシア (読み書き障害) —子どもたちの「学び」と「個性」. 講談社
- 宇野彰 (2002) : 発達性読み書き障害—神経心理学のおよび認知神経心理学的分析—. *失語症研究*, 22(2), 44-50
- 宇野彰 (2004) : 発達性 dyslexia. *Molecular Medicine*, 41(5), 601-603
- 宇野彰, 新家尚子, 春原則子, 金子真人 (2005) : 健常児におけるレーヴン色彩マトリックス検査—学習障害児や小児失語症児のスクリーニングのために—. *音声言語医学*, 46, 185-189
- 宇野彰, 春原則子, 金子真人, Taeko N. Wydel (2006) : 小学生読み書きスクリーニング検査—発達性読み書き障害 (発達性 dyslexia) 検出のために—. インテルナ出版

### Summary

Dyslexia is the disorder of having extreme difficulty in reading even in the absence of intelligence and perceptual problems, and as a result, writing also becomes difficult. In this study, we conducted screening of lower grade elementary school students in order to review methods for early detection of children with dyslexia. The subjects consisted 672 grade 1 and 2 elementary school students attending normal class. The screening was carried out in two stages. In the first stage, class teachers were asked to evaluate reading and writing skills in the children using a checklist, and select children with problems. As a result, 18 children were selected from the first graders and 46 from the

second graders. In the second stage, the Screening Test of Reading and Writing for Japanese Primary School Children (STRAW) and substitute IQ test "Raven's Colored Progressive Matrices (PCPM)" were conducted on the selected children individually. Eventually, one first grader (0.3%) and ten second graders (2.9%) were suspected to have dyslexia. Based on these results, the suitability of the test methods and tasks in implementing them were discussed.

**Key Words** : dyslexia, screening test, elementary school children

(Received January 28, 2008)